

ネルヴァルとファール・ドリヴェ : モーゼの宇宙進化論

著者	間瀬 玲子
雑誌名	筑紫女学園大学紀要
巻	17
ページ	51-59
発行年	2005-01-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1219/00000905/

ネルヴァルとファーブル・ドリヴェ

—— モーゼの宇宙進化論 ——

間瀬 玲子

Nerval et Fabre d'Olivet, la Cosmogonie de Moysé

Reiko MASE

I. 序

ジェラルド・ド・ネルヴァル Gérard de Nerval は「アルチスト」紙 *Artiste* 1844年9月15日号に「ディオラマ, オデオン座」Diorama, Odéon と題する評論を発表した。この新聞記事の中でネルヴァルは19世紀前半のパリで大流行したディオラマという名の視覚芸術について言及している。¹⁾

この記事の中でネルヴァルはディオラマで描かれている大洪水に注目している。そして聖書に描かれているエノクの町とエロイムの解釈を行っている。本論文ではネルヴァルが聖書の解釈の根拠としている書物を著したアントワヌ・ファーブル・ドリヴェ Antoine Fabre d'Olivet のエノクの町に関する解釈に限定して論じてみたいと考える。

II. アントワヌ・ファーブル・ドリヴェについて

アントワヌ・ファーブル・ドリヴェは1767年12月8日にフランスのガンジュ Ganges で生まれ、1825年に亡くなった。詩人、ラングドック人 [南フランスの地域圏名]、音楽家、音楽評論家、演劇作家、言語学者、歴史家、文献学者、

神智学者という多彩な面を持つ人であった。²⁾ 彼はいくつかの書物を世に出している。主要著書は『13世紀のオック語詩, トルヴァドゥール』 *Le troubadour, poésies occitaniques du XIII^e siècle* である。

トルヴァドゥールは12世紀から14世紀の南仏の吟遊詩人のことである。南フランス・プロヴァンス文学保存運動の先駆者としての彼を一番よくあらわしている。³⁾ またネルヴァルは上記のように新聞記事でファール・ドリヴェの名前だけを記載したが、彼の作品でその内容から関係があるのは『復元ヘブライ語論』(1815 - 1816) *La langue hébraïque restituée* である。⁴⁾

ファール・ドリヴェに関するまとまった研究書を刊行したのはレオン・セリエ Léon Cellier だけだろうと考えられる。⁵⁾ それはマルセル・バラル Marcel Barral が1997年に刊行された『13世紀のオック語詩, トルヴァドゥール』の書物の冒頭に紹介文を書いており、そこでレオン・セリエの研究書だけを紹介していることから推察できる。⁶⁾ レオン・セリエはネルヴァルがファール・ドリヴェにどの程度影響を受けたかに関しては、以下のような意見も紹介している。

On est amené à conclure que pour Nerval, Fabre d'Olivet était un nom plus ou moins légendaire, et qu'il parlait de lui sans le connaître.⁷⁾

ネルヴァルにとってファール・ドリヴェは多かれ少なかれ伝説の人であり、彼を知ることなく彼について語っていると結論付けるにいった。

レオン・セリエがこのような意見に全面的に賛成しているようには思えないが、ネルヴァルがファール・ドリヴェから具体的にどのような影響を受けたのかについての考察は見当たらない。

Ⅲ. ネルヴァルによる「エノク」の町の記述

「序」で言及したようにネルヴァルは「アルチスト」紙1844年9月15日号に19世紀前半に流行したディオラマに関する評論を発表している。この評論の中で本論文の主たるテーマである「エノク」に関する箇所の一部を引用する。

La ville d'Énoch ou de Hénoch, ce Paris antédiluvien, cette cité des abominations primitives dont la Bible ne dit qu'un mot, avait été bâtie par Caïn. (...) La ville de Caïn était le principal séjour de cette race intermédiaire dont les iniquités furent plus qu'humaines, puis' on ignore encore si ces êtres bizarres avaient été produits par des anges ou par des démons mélangés aux filles des hommes.⁸⁾

エノク (Énoch) あるいはエノク (Hénoch) の町、大洪水以前のパリとも言える、聖書がそれについて一言しか書いていない原初の嫌悪すべきこの町はカインによって建設された。(中略) カインの町はこの中間的な種族が滞在する主たる町で、その退廃は人間を超えていた。というのはこの奇妙な存在は天使によって作られたのか、悪魔と人間の娘が交わってできたものなのかわからないから。

以上の文章は、新聞に発表されたネルヴァルの評論のごく一部に過ぎないが、この引用で読み取れるのは、エノクの町がカインによって建設され、原初の嫌悪すべき退廃の町であるという解釈をネルヴァルが行っているということである。なお旧約聖書「創世記」第4章ではエノクは次のように記されている。

カインはその妻を知った。彼女はみごもってエノクを産んだ。カインは町を建て、その町の名をその子の名にしたがって、エノクと名づけた。⁹⁾

ネルヴァルが言う聖書の記載とはこの数行のことである。この数行だけなら、ネルヴァルが強い関心を抱くとは思えない。ネルヴァルが町としてのエノクについて言及したのは引用した評論だけであるが、人名としてのエノクは他の作品の中でも数箇所言及している。なぜネルヴァルが「エノク」に興味を持ったのか、その謎を解く鍵のひとつが以下に述べるファール・ドリヴェの解釈であろうと考えられる。

IV. ファール・ドリヴェによるエノクの町の解釈

ファール・ドリヴェは『復元ヘブライ語論』の第二部で「モーゼの宇宙進化論」と題した翻訳を掲載している。この点についてファール・ドリヴェ『原理において復元したオック語』 *La langue d'oc retablie dans ses principes* の編者は『復元ヘブライ語』について次のように書いている。

Il poursuivait à ce moment l'édification de son grand ouvrage d'étymologie "La langue hébraïque restituée" qu'il parvint à faire sortir en 1815 des presses nationales, grâce à Lazare Carnot. Ouvrage dans lequel on trouve réunies: (...)

une Traduction en français des dix premiers chapitres du Sépher (la genèse), contenant la Cosmogonie de Moïse.¹⁰⁾

彼（ファール・ドリヴェ）はこの頃彼の主要な語源に関する著書『復元ヘブライ語論』の完成をめざしていた。それを彼はラザール・カルノのおかげでプレス・ナショナルから1815年に出版させることになった。その著作の中で次のような文章が集められている。（中略）

モーゼの宇宙進化論を含むセフェール（創世記）の最初の10章のフランス語訳

ここで問題となっているファーブル・ドリヴェが訳した『創世記』の最初の10章の構成は以下のとおりである。

- Ch.I. La principiation
- Ch.II. La Distinction
- Ch.III. L'Extraction
- Ch.IV. La Multiplication divisionnelle
- Ch.V. La Compréhension facultative
- Ch.VI. La Mesure proportionnelle
- Ch.VII. La Consommation des choses
- Ch.VIII. L'Entassement des espèces
- Ch.XI. La Restauration cimentée
- Ch.X. La Puissance aggrégative et formatrice ¹¹⁾

- 第1章 原則化
- 第2章 識別
- 第3章 出自
- 第4章 分割の増大化
- 第5章 随意の理解
- 第6章 調和のとれた割合
- 第7章 物の消費
- 第8章 種の積み重ね
- 第9章 強固な復古
- 第10章 アグレガティブで形成される力

この中でエノクが言及されているのは第5章の18, 21, 22である。その部分を以下に引用してみよう。

18. Cependant *Ired*, le mouvement persévérant, avait existé pendant deux mutations temporelles, six décuples, et une centaine entière de mutation lorsqu'il produisit l'existence de H`eno`h, le mouvement de centralisation et de contrition, qui rend stable et consolide le bien ou le mal.

21. Cependant H`eno`h, le mouvement de centralisation, avait déjà existé pendant cinq mutations temporelles et six décuples, lorsqu'il produisit l'existence de Methoushalê, l'émission de la mort.

22. Or, H`eno`h, mouvement de contrition et sentiment de pénitence, suivit constamment les traces d'Ælohîm, LUI-les-Dieux, après cette génération, et il produisit d'autres êtres émanés.¹²⁾

18. しかしながら粘り強い変動であるイラデが二つの一時的な変動，6回のデキュブル（10倍），百の変動全体の間に存在した。その時彼はエノクの存在を作り出した。中央集権化と痛悔の変動であるエノクは善と悪を安定化させ，強固にした。

21. しかしながら中央集権化の変動であるエノクは5つの一時的な変動，6つのデキュブル（10倍）の間に存在した。その時エノクは死の流布であるメトサエルの存在を作り出した。

22. ところで，痛悔の変動，悔俊の感情であるエノクには神々の彼であるエロイムの足跡が絶えずついてきた。この世代の後，彼は他の発散する存在を作った。

以上はファーブル・ドリヴェが翻訳した『創世記』の最初の10章の中で「エノク」に関連のある節である。私たちが普通見るような聖書の訳とは全く異なる

文章である。ここで読み取れるのは、エノクが変動と深く関係していること、また痛悔、悪、死とも関連があることであろう。これは本論文で問題としているネルヴァルがディオラマに関して執筆した雑誌論文の分析に大いに役立つと考えてよい。

『19世紀ラールス大事典』 *Grand Dictionnaire universel du XIX^e siècle* の Fabre d'Olivet の項目には次のような説明がのっている。

Selon lui, la *Genèse* est une allégorie de la création telle que la concevaient les collèges des prêtres égyptiens, dont Moïse faisait partie...¹³⁾

彼（ファール・ドリヴェ）によると『創世記』はモーゼも所属していたエジプトの僧侶の学校が考案した創造の寓意である。

以上の分析により、ファール・ドリヴェの『創世記』の翻訳には「エノク」に関する記述があり、しかもその記述がネルヴァルの雑誌評論の内容と深く関わることは明白である。しかも19世紀当時流布していた百科事典では、ファール・ドリヴェが『創世記』に対して関心を持っていたこと、それが東方の国と深い関わりがあったことを記している。こうなるとファール・ドリヴェの『復元ヘブライ語論』の中に収録された『創世記』の翻訳が、ネルヴァルが目した視覚芸術であるディオラマの思想的背景の一つと考えても筋違いとは考えられない。ただし具体的にファール・ドリヴェが書いた文章のどの部分が最もネルヴァルに影響を与えたかとなると、まだ研究の材料が不足しているもの事実である。つまり他の作家、思想家、哲学者の書籍などと比較検討しなければ結論が出ない部分もかなりあると言えると思われる。

V. 結びに代えて

本論文においてはネルヴァルが注目したディオラマの思想的背景の一つとしてアントワーヌ・ファーブル・ドリヴェに注目した。とりわけネルヴァルはファーブル・ドリヴェの著書、『復元ヘブライ語論』の中の「エノクの町」と「エロイム」の二点に注目したと考えられる。今回は「エノクの町」だけに焦点を絞って考察した。ネルヴァルは新聞評論でファーブル・ドリヴェを数度言及していることから、彼の名前を知っていたことに疑いはない。また大洪水と関連して言及していることから、ファーブル・ドリヴェの『復元ヘブライ語論』がネルヴァルが参考にした文献として考えることも疑いがないと考えられる。そこでネルヴァルがファーブル・ドリヴェの『復元ヘブライ語論』の最後に収録された『創世記』の最初の10章の翻訳のどの部分から直接影響を受けたのかを考察した。『創世記』第5章の18, 21, 22節を読むと多くの変動、痛悔、死の流布、悪のようなキーワードを探ることができた。これは通常私たちが見る旧約聖書とは違った翻訳である。ネルヴァルがこの『復元ヘブライ語論』を詳細に読んだという証拠はない。しかし当時ファーブル・ドリヴェは非常に著名な人物であり、このような創世記の解釈があるということがネルヴァルの周囲で知られていたと考えても不思議ではない。

本論文では19世紀のパリで流行したディオラマの精神的背景としてファーブル・ドリヴェを取り上げた。しかも彼が言及した「エノク」に絞って考察した。もうひとつの大事な論点である「エロイム」は今後の重要な課題として考察を続ける必要がある。また本論文で問題としたネルヴァルの新聞評論で言及した思想家、作家たちが聖書の解釈にどのように関わったかも今後の課題である。

注

- 1) ネルヴァルがディオラマをどのように考えていたかについては以下の論文の中で考察した。

間瀬玲子「ネルヴァルが見たディオラマの幻想」『筑紫女学園大学紀要』第16号(2004,

- 1), pp.55-73.
- 2) Antoine Fabre d'Olivet, *La langue d'oc retablie dans ses principes*, Ganges, Association Fabre d'Olivet, Editions David Steinfeld, 1989, p.XIII を参考にした。
- 3) Fabre-d'Olivet, *Le troubadour, poésies occitaniques*, Nîmes, Lacour, 1997.
- 4) Fabre-d'Olivet, *La langue hébraïque restituée*, Lausanne, Édition L'Age d'Homme, 1991.
- 5) Léon Cellier, *Fabre d'Olivet, contribution à l'étude des aspects religieux du romantisme*, avec une introduction de J.-C Richard et une bibliographie des œuvres de Léon Cellier par R. Bourgeois, Genève, Slatkine Reprints, 1998 (Réimpression de l'édition de Paris, 1953).
- 6) Fabre-d'Olivet, *Le troubadour, poésies occitaniques*, p.1.
- 7) Léon Cellier, Fabre d'Olivet, *contribution à l'étude des aspects religieux du romantisme*, p.360.
- 8) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, , édition publiée sous la direction de Jean Guillaume et de Claude Pichois avec, pour ce volume, la collaboration de Christine Bomboir, Jacques Bony, Michel Brix, Jean Céard, Liven d'Hulst, Jean-Luc Steinmetz et Jean Ziegler et avec le concours de Pierre Enckell et d'Antonia Fonyi, Paris, Gallimard, coll. Bibliothèque de la Pléiade , 1989, p.840. 翻訳をする際、『ネルヴァル全集 幻想と綺想』筑摩書房, 1999年に収録された坂口勝弘訳「ディオラマ, オデオン座」を参考にした。旧版の『ネルヴァル全集』筑摩書房, 1976年に収録された稲生永訳「ディオラマ」は翻訳だけでなく、充実した注も参考にした。
- 9) 『旧約聖書』日本聖書協会, 1955年, p.5.
- 10) Antoine Fabre d'Olivet, *La langue d'oc retablie dans ses principes*, p.XVI.
- 11) Fabre-d'Olivet, *La langue hébraïque restituée*, p.348.
- 12) Fabre-d'Olivet, *La langue hébraïque restituée*, p.326-327.
- 13) *Grand Dictionnaire universel du XIX^e siècle*, tome 10, Nîmes, C.Lacour, 1990, p.20.

付記 本研究は、平成16年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）(2) 課題番号16520196)「ネルヴァルにおけるディオラマの思想的背景」研究代表者 間瀬玲子)により遂行した研究の一部を公表したものである。